

屋久島に上陸の後、島内での対応はどうだったのか『島津国史』並に『西洋紀聞』からさわりを引いて加えてみたい。

江戸時代、日本が西洋文明を導入するきっかけをつくったのは、イタリア人宣教師ジョバンニ・シドッティ神父である。今日の社会常識では計りしれない厳しい鎖国制度の中で、シ神父は屋久島の恋泊、唐ノ崎海岸に単独で上陸した。宝永五年（一七〇八）八月二十八日（陰暦）のことである。

当時屋久島は島津藩の直轄地・口永良部と共に屋久島奉行所の管理下にあつた。本来あるべき奉行所記録やシドッティ関係書も廃藩置県に際して焼却され、島中にいま資すべきものを見ない。

そこで『島津国史』の第二十一代吉貴公御譜中から、シドッティ神父屋久島上陸の事項をみると、「宝永五年八月二十九日、隅州馴謨郡益救島の南、恋泊村の郷民等が、一人の異人を捕らえたが、何国の者とも知れない。その相は顔色白く鼻筋隆く、日本人の姿に頭を剃り、日本の衣服を着て日本の刀を帯びている。語音は異なり、漢字を用いず文字を横書きする。時に異人が自ら羅馬国の鬼利支丹であるという片言がようやく通じた……以下、長崎奉行所に引渡すまでの間、対長崎奉行所つづいて江戸幕府との交渉のあとが幾多つづられている。（本稿末尾参照）。

なお『薩陽落穂集』というのに、現場を見ていたような記事もあるから、シドッティ神父上陸の情報は当時藩内を相当広く飛び交つたものであろうか。また新井白石の『西洋紀聞』の上巻にはシ神父の上陸時の服装について「さかやきこの人のごとくにして、身には、木綿の浅黄色なるを碁盤のすじのごとくに染なしたるを、四目結の紋あるに茶色の裏つけたるを着て、

刀の長さ二尺四寸餘なるを、我国の飾のごとくしたる一腰をさしたるなり」と記している。実はこの服装をしたシ神父を最初に見た者は、外なる恋泊の藤兵衛で、しかも炭木切る山中であつては驚きもまた大きかつたと思うが、しかし藤兵衛のその後の処置対応は実に見事である。

藤兵衛が島津の役人や長崎奉行の訊問に答えた模様を捨つてみると、宝永五年八月二十九日、『恋泊松下で炭焼きに来て木を伐つて』いると、刀をさした見なれぬ人が来て、何か手まねきをする。言葉も通せず、怪しく近寄りがたくみえる処、水を所望されたので、持ち合わせの器で水を与える。更に招かれたが刀を差しているので要心していると、刀を鞘ごととつて差し出したので受取つて木の根方に置いて、他に人が居ないかと磯辺を見たが誰もいないので、村にゆき安兵衛に会い、怪しい人発見を村にふれさせ、折から荷を持つて通りかかった平内村の百姓五次右エ門と喜右衛門を伴なつて引き返して、異人のいる所に来たり、つかれている様子で人里に行くのを望む風を見て、喜右衛門が大袋、五次右衛門が刀、藤兵衛が當人に手を添えて助けながら、恋泊の藤兵衛宅まで連行し、折よく訪ねた近村の五右衛門と二人で食事の用意をして異人に与えた。異人は礼金を渡そうとし、何かと話しかけるが言葉は全く通じない。そんなこんなしているうちに島の役人・番人が大勢来たので、他の四人もそれぞれ役人の間に答える。辻つまの合つたところでシ神父を伴つて役人は奉行所に引上げる。かくてシ神父の恋泊滞在は僅かに一日であった。幕府の命令で長崎に送られるまで神父は宮之浦の仮牢に起居したのである。仮牢の場所も脇町にあつたというだけでいまに定かでない。

シドッティ神父を乗せて島津の船は十月十七日宮之浦を出港しているが、前記の藤兵衛・安兵衛・喜右衛門・五次右衛門それに阿波徳島の漁師で出漁中、たまたまシ神父を乗せたボートに遭遇した船頭市兵衛・水主実兵衛・喜兵衛・清左衛門・市十郎・休助の十一名も、取調べを受けるために同船していたのである。シドッティ神父にからむ文化史的事実に寄与した島民の足跡も忘れてはなるまい。

●『島津国史』第二十一代吉貴公御譜

宝永五年八月二十九日隅州馴謨郡益救島久作屋之南恋泊村之郷民等怪捕一人異人不知何國者其相顔色白隆準而剃頭於日本人

益救島同十九日着薩州坊津同二十二日用人相良権大夫長規目附別府式部左衛門助員物頭相良四郎兵衛頼繼馬廻肥後長左衛門盛包其外警固之士発坊津取陸乗船出水脇元十一月九日護送異人於長崎奉行所詳聞干後也……

ヨハネ・シドッティ

ローマ教皇庁から日本においての殉教まで

日本に於てのキリスト教の布教史には、ヨハネ・シドッティ神父の姿は単独に雄々しく輝いている。彼は真にローマ教皇庁の榮光だ。シドッティ神父が一七一五年十一月二十七日(陽曆)に殉じてから、今年二百五十周年目にあたる。シドッティ神父の殉教は、特にその最初の訊問の内容はオランダ人のカルビン教徒バレンティン師の証言に基くが、ことに日本の歴史家で文化人であった新井白石の著書によつても伝えられている。フラン

シスコ・ザビエルの来日(一五四九年)以来、イエズス会、フランシスコ会、ドミニコ会、そしてアゴスチノス会の神父達が、日本に於てとても有望な布教の主役を演じた。ところが彼らの活動は激しい弾圧によつて絶たれた。宣教師による上陸の最後の試みは一六四三年(寛永二十年)に遡る。シドッティ神父は上記の修道会のいずれにも属していなかつたし、また日本に於ける布教の盛期の人物でもなかつた。従つてシドッティ神

父は、極めて孤独な立場にあつた。重責を負おうとしても励ましてくれる指導者は一人もなく、また日本に再び入国する試みは、皆んなに無理と思われていた。日本は鎖国という孤立した、不信な、頑固な制度にとじこもり（その理由は省略）、一八五三年にアメリカより威嚇があつた時、初めてそれを脱皮するに至つた。熱心な宣教師達に教わつた何十万人の信徒達は、一体どうなつてしまつたのだろうか。次々に考え出された拷問にも耐えた多数の殉教者を生んだその信徒達は？ 日本を包む沈黙は何を意味しているのだろう？ 信徒が信仰を捨てたしるしか？ しかし、彼等は殉教を誇りとする信徒の子孫ではなかつたか？ シドッティ神父はローマ教皇庁で聴講師を務めていたが、毎日、右の間の答えを求めていた。“咲いた神の國”とも云うべき信仰が広く栄えた日本に入国して信者の足跡を探すこと、あるいは司牧的な活動は出来なくとも、せめて信徒達に忘れられないことを証明すること、こういう決心が絶望ななかにも希望を持つ彼の心に、ますます湧き上がつて来た。

——病院で子供と共に——

シドッティ神父はイタリア・シリーリー島のパレルモ市の貴族の子として、一六六八年に生まれた。学問を学ぶためにローマに上つた。フェラリ枢機卿に聴講師として採用された。しかし、彼の真の召出しは早くも現われて來た。當時中国教会には、典礼の論争がおこり、その解決の為にクレメンス十一世教皇が、アンテオケの司教、テウルモン師を派遣した際に、シドッティ神父が司教に付添う許可を得た。一七〇三年初め、教皇の使節はジエノバを出港し、同年十一月六日、インドのポンデケリに

到着した。インドの典礼の論争に対し、否定の判断を下した教皇の代表は、七月二十一日にフィリッピンに向つて出発し、二ヶ月の航海を経てマニラに着いた。シドッティ神父はテウルモン神父に別れて四年間もマニラに滞在する。その間、日本語を習つたり、日本からの追放者等と付き合うことによつて冒険への心構えを学び、病院に住んで毎日患者達の世話をしていた。その仕事を離れる時があつたら、それは求道者に聖書を教えるためか、あるいは守備隊のスペイン兵のために神への畏れを訴えるためであつた。彼が献金を募つて病院の増築と、聖クレメンス学院の新築を実現した。これは一七一八年ローマで発行された資料「マニラにおけるシドッティ神父の短記録」による。この記録はスペイン語を、イタリア語に翻訳されたものである。シドッティ神父が日本への渡航を心がけ、その計画をマニラでの上司に打ち明けたとき、上司の方々は常識に基づいて、それは危険だと判断し、反対した。それでも後にはフィリッピンの総督自身が、自費で船舶を準備し、海軍大将自身が目的地まで操縦してくれたのは、他ならぬシドッティ神父の優れた人格による結果である。人間的な配慮は聖の上智に屈服しなければならない時がある。

——どなたですか——

一七〇八年八月二十三日 ミグエル・テ・エロリアガ大将とシドッティ神父は、サン・トリニテ号（三位一体丸）に乗船、長い航海の末、同年十月三日陸地を発見した。シドッティ神父を下船させるため、島の漁船の近づくのを待つて、何日間か岸近くを巡回したが好機を得なかつた。〔注 「島の漁師たちの

中にはそれとわかる合図を受けながら、後難を恐れて逃げ帰つた」との記録がある。」

やむなくエロリアガ大将と少數の乗組員がボートで、シドッティ神父を岸まで送ることにした。シドッティ神父は教皇をはじめたくさんの人々に宛てた手紙を残した。「その夜」シドッティ神父と大将がつらい別れをしたことは云うまでもない。(注「その夜」とは一七〇八年十月十一日(陰暦宝永五年八月二十日)の夜のことである。)シドッティ神父は日本人風に月代を剃り、浅黄色の碁盤目模様の着物を着て、二尺四寸の大刀を差して屋久島は恋泊唐ノ浦に単独の上陸を果たした。

侍姿に変装したシドッティ神父は、しかしシシリリー人の容貌を長くかくすることは出来ず、翌十月十二日(陰暦八月二十九日)のただ一日だけの自由の後、まもなく発見されて、薩摩の大名(屋久島の奉行所)に告発された。その日のうちに島の仮牢に移され、のちに幕府の命令で長崎を経て江戸に送られた。

長崎奉行所での訊問については、バレンティン師のオランダ語の著書である「一七〇八年日本に上陸したローマの司祭ヨハネ・パプティスタ・シドッティと長崎奉行との間の出来事の短記録」が出版されていることを、「日本のキリスト教の復興第一巻」(一八九六年パリ出版)でマナス師がのべている。次は十二月三十日に行なわれた第三回訊問の十七の質問の中から抜粋されたものである。

問 あなたの名前と位は何ですか。

答 聽講師司祭ヨハネ・パプティスタ・シドッティ、ローマ

教皇について第三の位です。第一は枢機卿、第二は司教、第三は聽講師。

問 本国で両親と親類はどんな身分にありますか。

答 父は死にましたが、母と姉妹一人と兄弟が残つて居ります。兄弟は私と同じ司教です。

問 いつから日本に来たいと思つていましたか。誰にあなたは発見されましたか。

答 若い頃から思つて居りました、そのため勉強してきました。コモ市でみつけた古い本を使って日本語を習いました。

問 どうして日本に来ましたか。

答 天皇に拝謁し、布教させていただいた上で、帰依させるためです。

問 上陸の時、四人と会つたが宗教の話をしましたか。

答 はい、もちろん。それは私の義務だし、私はそのためになりました。

――拷問的な監禁生活――

当時の厳しい法律によつて、彼の来日は將軍に報告されなければならなかつた。事実上、日本の統治者は將軍だつた。囚人をただちに江戸に護送するようにとの返事が来た。江戸は幕府の中心だつた。

一七〇九年の十月二十八日から十二月初め頃まで続いた旅の間は、椅子籠の中に足組をさせられたままだつた。足が痺れきつて永久に歩く能力を失つてしまつた。江戸での新しい訊問官は、先に示した様に文化上にも、歴史的にも有名な新井白石だつた。彼は宣教師とのまず裁判的な訊問、それから友好的な会話によつて『西洋紀聞』の題材を汲みとつた。白石は云う「彼(シドッティ)の返答は、私の手元にあるキリスト教の書物に

あつていた。ある人名と地名の発音が違つてゐるだけで、尋問により彼がすぐれた人間であり、又博識の持主であることを理解した。性格としては、眞実、謹厳、質素、そして節制の徳を持つており、特に彼の細心の注意力に魅了された。聖人の柔しさを備えていた。

白石は問う “教義のために遠方へ旅立つことは、まさに私利を乗り越えた善意です。しかし言われた通り、年取つた母と、もう若くはない兄がいれば、まだ捨ておくことは良心に許されるでしようか” しばらくしてシドッティは心をこめて答えた。

“日本に派遣されて以来、自分に託された使命を実現するだけを考えて來た。別れの時ほかない年とつた母と兄弟こそがこの美しい使命のために旅立つ私を喜びあつていた。そして聖なる宗教のためだというので、良い旅を祈つてくれた。”

—生き埋め—

新井白石は同時代の人の中で、すぐれた公平な判断力と寛容な見解の持ち主だった。彼はキリスト教の神学を幼稚的なものと思ひ笑つていたが、囚人に對して深い尊敬を抱いていた。そのため、再入国を試みた場合は厳しく処罰される事をいましめた上で、彼を追放するよう勧めた。にも拘らずシドッティは有名なキリシタン屋敷に終生禁錮が課せられた。ここは沢山の殉教者が言葉にも表せない拷問を受けたあの死の牢屋ではなかつた。むしろ拷問に屈服した人のために、刑の転換に使われる場所だつた。

この所に年寄り夫婦がつとめていた。この二人は同じところで一六八五年に死亡したと推定される、宣教師ジユベツテ木原

神父を知つた。木原神父によつて秘密の信仰に導かれてか、見知らぬ人々を救うためにすべてを捨てたシドッティ神父を見たときに感動を受けたので、二人は自分たちの心をシ神父に打ちあけた。〔注 二人とは牢番の長助・ハルであつた。〕シ神父は二人に洗礼をさづけた。一七一四年にそれがわかつた時、二人は隔離された。宣教師には又恐しい拘束が課せられた。オランダ人の証言によると、年とつた牢番に洗礼をさづけた後、四五五フィートの深さの土穴にシ神父は閉じ込められた。

穴の上には窒息を防ぐためと、僅かの食物を差し入れるために小さな入口が設けてあつた。一七一五年十一月二十七日英雄たる宣教師は生埋めになつたまゝ生涯を終えた。

飢餓や寒さなどの恐しい困難による死だつた。時にシ神父は四十七歳だつた。彼の七年間の布教生活は最後まで囚人の状態にあつた。

彼の犠牲を評価するために、神様だけが知る彼の秘密の生涯を知る必要があろう。この宣教師はいつか公式に聖人と称されるのが望ましい。また、それを願いたい。

彼が殉教まで人々に神の国のこととを証明しようとする覚悟をもつていたことを思えば当然なことといえる。こんな宣教師のおかげで何万人という日本の信者たちが、信教の自由の日をのぞみながら、永い間、弾圧に堪えて信仰を保ち得て來た事実を思ひたい。